

防災研修会 台風



ばんだい よしのぶ
萬代 好伸 さん

★講師略歴★

- 昭和38年12月4日生まれ（59歳）
- 宮城県石巻市生まれの石巻市育ち。
- 一般社団法人OPENJAPAN緊急支援プロジェクト「重機および災害語り部担当」

繋がり繋げる支援の輪 過去から学び未来へ託す

東日本大震災当時、5分を超える地震がありました。揺れは次第に大きくなり、立っていられない程でした。大きな揺れの波が3回程発生しました。防災無線からは大津波警報の音声、仕事を早めに切り上げ、信号機も機能せず大渋滞の中、家へ帰宅すると、隣町では津波第1波を観測。その大きさは6メートルを超えたとの情報でした。程なくして、津波による黒

あの日の出来事

令和4年9月の台風第15号災害を教訓に、川根本町では令和5年度に「災害に強い地域づくり」を目標に掲げ、地域の防災力向上に向けた取組を計画しています。今後、発生が予想される風水害や南海トラフ地震への備えとして、町全体が共通認識のもとで今後の対策に取り組むことが必要と考え、7月21日・22日、山村開発センターにて「防災研修会」を開催しました。講師として、一般社団法人OPEN JAPAN緊急支援プロジェクト重機および災害語り部担当の萬代好伸さん（宮城県石巻市）をお招きしました。

萬代さんは、2011年の東日本大震災で被災以降、全国で復興支援活動を行う傍ら、毎年のように発生する自然災害の被災地で、得意とする重機操作等の技術を提供しています。また、昨年の台風第15号の際には、川根本町の災害復興に向けた支援にご協力いただきました。各地の被災された地域の人々に寄り添い、今後発生するであろう災害への備えと心構えを伝え続けている「命の伝道師」です。2018年7月発生の西日本豪雨災害からは、災害支援を生業として一般社団法人OPEN JAPAN緊急支援プロジェクトのスタッフとなりました。今回の講演会を振り返ります。

い壁を目の当たりにした私は、急いで車を引き返し、間一髪で高台へ避難することができました。

なんだよ神様・・・

たまたま、自分は助かりました
が、あの日は多くの友人・知人を亡くしました。実家は津波で大破。高齢の両親は、その時点では確認が取れず諦めました。高台から町を見下ろせば、ガスボンベなどがそこら中で爆発を繰り返し、工場からは炎が舞い上がり、建物

の屋上からは逃げ遅れた人たちが助けを求め叫んでいました。目の前には家の柱にしがみつき助けを待つ若い女性が見えましたが、どうすることもできず、流されていった光景をただただ見ていることしかできませんでした。なんだよ神様・・・あんまりじゃないか。自分の無力さを悔やみました。

当時は3月、東北はまだ雪が降っていました。ずぶ濡れの被災者にも容赦なく白い雪が降り積もります。せつかく助かって、低体温症によって命を落とす人々が大勢いました。避難所に移動できたのは津波から3日後のことでした。その道中、ガレキの中からは流されていった人々の手足がのぞいています。中には、背中にあるドセルを背負ったままの子どもの遺体もありました。なぜこんな小さな子がこんな目に合わなければならぬんだ。悔しさがこみ上げました。上空にはカラスが飛び回っています。私は、近くにあってトタンを、その子に被せてあげることしかできませんでした。歩けば亡骸ばかりが目に見えます。遺体は水で膨れあがり、男性だったのか女性だったのかすら見分けが付きません。やっとの思いで避

難所に着くと、家族との再会を果たしました。両親は、津波注意報の発表直後に食料を全て持って避難していました。防災意識の高い両親は、自分にとって最も見習うべき教訓となりました。

災害を経て

災害が過ぎて、それで終わりではありません。「関連死」というものがあります。

関連死とは、直接、建物の倒壊や災害の被害によって亡くなるのではなく、避難所で病気の発症や持病の悪化により治療が受けられず、また、災害のショックなどから、今後どうやって生きていくか分からず、自ら死を選択してしまうことなど、間接的な原因で亡くなってしまうことを指します。それは一説には災害で直接亡くなる人の人数よりも多いと言われています。私たちには、そのように困り果てている人をどのように助けたいのか、一人の人間として自分には何ができるのか、どう守るのかを考えていく必要があります。自分にできることを賢明にやっいていく。困難を克服する。災害は、海のみならず、川根本町も

しかり、日本にいる限りはどこにいても起きる可能性があります。そして私たちにはお互いを助け合うことができる力を持っています。

食料配給で並んでいた話です。復興支援で日本を訪れた外国の方から、このような質問を受けました。「なぜあなたたち日本人は自分がもらった食べ物に人分け与えるのですか？とても信じられません」海外では災害時、食べ物ひとつで争いが起きるのに、日本ではそれがありません。と驚いていました。私は、改めて、お互いを支えあう大切さを考えさせられました。それこそが私たち日本人の持つ強さの理由なのだと思います。私たちは、何があってもお互いを助けあうことのできる、思いやりの心を持っています。

命でんでんこ

岩手県の沿岸地域では、「命でんでんこ」という「ことわざ」があります。それは、「たとえ我が子が目の前で流されても決して戻らな・自分を守り子孫を残せ・そして継いでいけ」という意味です。

こんなエピソードがありました。自分の子どもを助けるために戻った母親が亡くなりました。助かる命も助からず、2名が犠牲になり、周りからは、わざわざ死ぬために戻ったのか・・・と言われてしまいました。私が住んでいた地域は「防災に強い町」というキャッチフレーズを掲げていますが、いま思えばなんの根拠もありません。人間は、どうしても都合の良い解釈をしてしまいます。本当に大切なのは、実際の生死の瀬戸際に、いかに「逃げる」という意識を持っているかということ。災害は、悲しみだけが置き去りにされるものです。自然は容赦しません。常に最悪を想定し、備えるべきものは備えること、いざとなったらどこに避難するのかを考え、今いる建物の非常口はどこにあるのかなど、「いま」を常に意識・認識し、知識として知っておくことが大切なのです。そして、これからは生きる災害を知らない子どもたちにもどのように伝え、防災意識を高めていくのが私たち大人の役割なのです。